



DVD『スーパーの女』
¥4,935
発売元・販売元/
ジェネオン エンタテインメント



沖繩観光に思うこと② 「従業員は知っている」

伊丹十三監督『スーパーの女』を10年ぶりに観ました。1996年に封切られたこの映画は10年後の今も新鮮で、娯楽映画と侮るなかれ、事業再生のエッセンスを的確に表現しているのです。スーパーの旧体制を象徴する悪役店長は、「商売と屏風は曲がらにや立たぬ」が口癖。売れ残った魚や肉の日付を変える「リパック」や、鮮度の落ちた食材を無理やり惣菜にすることを「商売の工夫」と表現していました。映画では分りやすく「悪役」になっていますが、製造過程や仕入れルートの不明瞭な商品添加物だらけの食品、その場を繕うクレーム処理、形ばかりのサービスなど、顧客に対する「嘘」があまりに一般的になってしまった、現代経営を象徴しています。

対して、「スーパーの女」の事業再生の秘策は、先端の経営理論でも、M&Aでも、株式上場でも、世の中の経営者が「事業再生」と呼ぶ早期退職でもなく、「正直であること」。ごまかし商売を止めて、自分たちが胸を張れる商品をごく正直に並べたのです。これに敏感に反応したのは従業員です。商品に「ごまかし」があることを知っていた従業員は、自分たち

が働いているスーパーで買い物をすることがなかったのですが、店頭に正直な商品が並ぶと真っ先に熱心な顧客になるのです。

この映画を見て、沖繩のホテルやお土産物屋さんのことを考えずにはいられません。従業員を含む地元の利用率は低いよなあ。よく「沖繩県の所得水準の低さが理由だ」と説明されるのですが、いやいや、人間関係にお金を借しまないのがむしろ沖繩の県民性。・・・従業員や地元の人たちが、心から売りたい、利用したい、と思える商品やサービスが本当に提供されているのかなあ。成長著しい沖繩ですが、好事魔多し。お客様が多くなるごとに質を重視する姿勢が求められるのだと思います。

樋口耕太郎 (ひぐち・こうたろう)

岩手県盛岡市出身。
1989年野村證券株式会社入社。2001年株式会社レーサムリサーチ取締役。同社のホテル事業戦略を立案し、2003年にグランドオーシャンホテル(元オーシャンビューホテル)、2004年にサンマリーナホテルの代表取締役社長に就任。現在は沖繩に特化し、リゾートホテルなど「労働集約的サービス事業」の事業再生を専門とするトリニティ株式会社(www.trinityinc.jp)を創業、代表取締役社長。沖繩在住、42歳。

